

賢い患者に なるために

①事実を隠されるとトラウマになる

②どの段階でも真のコミュニケーションを

事実を正直に伝えることの大切さを、私自身の病気を通じて、改めて考えさせられる機会がありました。

左足に肉腫ができ、勤務する病院で1月に手術を受け摘出しました。転移もありませんでした。詳しい検査の前に自分で触ってみて、「たぶんがんだろう」と思っていました。でも、

同僚は「脂肪腫だろう」と言います。専門病院で経験のある、その彼がそう言うのです。

実は、彼は検査前から、「がんかもしれない」と疑っていたことを、後に教えてくれました。「心配をかけたくなかった」から、「脂肪腫」と言ったのでした。

気持ちには十分理解できます。

それに、彼には「うそをついた」という意識もないでしょう。でも、それが結構トラウマにつながるので。「もう大丈夫だ」と言われても、「本当なのか。またうそじゃないだろう」と勘ぐってしまうのです。

「うそをつかれていたのかも知れない」というトラウマは大きなものがあります。微妙なこと

なのですが、どの段階でも、真のコミュニケーションが大切であることを考える機会となりました。

患者は「家族に本当のことを話さないで」と言い、家族は「本人に伝えないで」と望む。こんな場面も多いと思います。互いに相手をおもんばかっているのでしょうか、いったんそ

上野直人 医師



うえの・なおと 米テキサス州立大M・D・アンダーソンがんセンター准教授。89年、和歌山県立医大卒。米ピッツバーグ大付属病院などで一般内科研修。98年に同センターへ。米内科専門医、米腫瘍内科専門医。

ういう状態をつくってしまうと、その後、ずっと「フリをして」過ごさなければいけなくなります。これには大変な労力が必要です。必要です。

こうした配慮のつもりなのですが、しかし、それは本人が、そして周囲の人が自分自身を納得させるために、「良かれ」と思いたいだけなのではないでしょうか。

(続きはアスパラクラブで)